
マ・クベの憂鬱

水井 安幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マ・クベの憂鬱

【Nコード】

N2410G

【作者名】

水井 安幸

【あらすじ】

オデッサ基地を防衛するマ・クベのとある1日。

高い地位にある士官、それも重要な資源採掘地帯であるオデッサの基地司令を任せられる程になれば、主な仕事は書類決裁である。前線で戦うことに比べれば書類決裁なぞお遊びも良いところだ——と思う人もいるかもしれないが、基地の運用、補給、本国に送り届ける資源、人事、その他数限りなく書類は用意されている。その量は膨大であり、頭脳に長けていると自負しているマ・クベにおいても相当な負担となっていた。勿論部下の前ではそのような素振りを見せるはずもない。士気にかかわるからだ。自らの戦場であり戦闘相手である書類を前に果敢に奮闘していたマ・クベにさらなる試練が舞い降りようとしていた。

連邦軍がオデッサへの大規模な反攻作戦を開始しようとしている——連邦に潜らせたスパイから送られてきた確かな情報がマ・クベの耳に届いた。連邦がMSを既に量産体制へと移行しつつある事を考えればこれは重大な脅威であり、すぐに連日連夜の対策会議が開かれることになる。基地司令であるマ・クベも当然この会議には出席しなければならぬから、通常業務の書類決裁に加えてさらに負担がかかる。さらに各部署との調整、防衛網の設置と必要な資材、部隊の配置、本国への援軍要請といった書類仕事も増えることになりマ・クベの疲労はいよいよ限界に達しつつあった。

少々目の熊が目立ち始めてきたことを気にしつつ、いつもどおり書類に追われていると扉をノックする音が聞こえた。あの叩き方はウラガンだろう。

「入れ」

「失礼します」

そう言って入ってきたのは特徴的な濃い眉毛にでかい図体。やは

リウラガンであった。

脇にはノートパソコンを抱えている。彼も仕事の最中だったのだろうか？

「うむ。私は忙しいのだ。手短に頼むぞ」彼の敬礼に返礼しつつ答える。

「はっ、オデッサ周辺にしかけてあるセンサーが警報を鳴らしまして、かけつけた巡回中の部隊が敵の新型機らしきMSと交戦したとの報告が入ってきたのであります」

「連邦の新型機だと……？」

連邦のMSには判明しているだけで3種類。ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク。いずれもザクマシンガンが全く通用しないばかりか戦艦並の火力を有する恐ろしい相手だ。我々が木馬——ホワイトベースと呼んでいるMS母艦に搭載されていて、ガルマ・ザビ大佐を葬り去ったという実績を持っている。これら3種類のMSから得られたデータを元に作られた量産型らしきMSが出現したと各地で報告がされている今の状況下において、歓迎すべき事ではない。

「そうであります。巡回中の部隊は陸戦型ザク3機であります、うち2機が撃破され、1機は辛くも逃げ延びたのであります」

「ほう……」

つまりザク3機でも話にならなかったわけか。この上まだ強力なMSがでてくるのかと思わず机を叩いてしまいそうになるが、ばれないよう拳を握りしめるだけに留める。

「幸いにも、逃げ延びた1機が残した記録映像は無傷で残っておりました。御覧になりますか？」

「うむ。そういうことなら拝見しようか」

内心の焦りを声に出さず、あくまで余裕を持って話す。司令が無様に慌てては部下に示しが付かない。

どうやらウラガンが持っていたノートパソコンはこの事に使っためだったらしい。映像が入ってるらしいディスクを挿入して準備を始めている。果たして新型とはどういったMSなのか。

「映像、出ます」

オデッサ周辺にしては珍しく平坦な地形が広がる場所で、前方にザク2機が見える。うち右のザクはツノがあるから隊長機だろう。どうやら前に2機、後に1機の編成で索敵してる最中らしい。

「たった1機で何しに来やがったんだろうな？」

「どうせ単なる偵察機だろ。楽勝、楽勝」

「デミアン、アルバート、油断するんじゃない。敵はこの辺りにいるはずだ。警戒しろ」

パイロット達の無駄な会話が耳に入る。ウラガンめ、どうせなら新型機が出てくる場所だけ編集してくれば良い物を、と考えたその時、突如前方右のザクの右腕が爆発で吹き飛ぶ。ザク自体も衝撃で左にいたザクの方に吹き飛び、寄りかかる形になる。

「なんだと!？」

「大丈夫ですか隊長!」

「ああ、すまん……機体ダメージは……右腕損傷以外なんともないな。運が良い。それよりも散開だ、敵襲だぞ!!くそ、いると分かっっているながら情けねえ」

いきなりの敵襲に見ていたマ・クベもつい口から疑問を滑らしてしまう。

「なにが起こった?」

すぐにカメラは右の方を向いてくれた。そこにはガンタンクらしきMSの左腕から硝煙が上がっている。確か40mm4連装ボップミサイルランチャーと呼ばれる武器だったか。まるでガトリングガンのような形が特徴的だ。よく見ると右腕の方は左腕と違いぼっかりと空洞が出来ているように見える。遠目からなので詳しくは分からないが、左腕を大砲にしたマイナーチェンジ型だろうか?そばに大きな岩があることからこれで身を隠して待ち伏せていたのだろう。「恐らく、このMSの砲撃でしょう」呟いた独り言に近い言葉をウラガンは律儀に返した。

「しかしこれは、我々がガンタンクと呼んでいるものではないのかね？」

「はい、いいえ。形は似ていますが、最後まで御覧になればわかります」

映像では片腕のザクが指示を飛ばし、2機のザクが敵MSの左右両面に展開しようとしている。片腕のザクは器用に左腕だけでザクマシンガンを操り射撃、さらにブーストをかけながら左右へと未来位置を予測させないように動いている。

カメラはガンタンクを左に捕らえながら弧を描いて接近していく。突如、敵MSの肩が光った。

けたたましいキャタピラの音と共に敵MSの左へと展開しようとしていたデミアンに肩を光らせながら急接近する。

「なんだあの加速は……いや、加速だけじゃないな」

パイロットの驚いている声が聞こえてくる。

余りの速さに一瞬見失ったカメラが慌ててピントを合わせると、肩にはガンタンクに付いてあるはずの120mm低反動キャノン砲が無く、巨大なブースターが取り付けられている事が分かった。肩が光ったのはこのブースターが吐き出す光だったのだ。

接近していたザクもこの敵MSがガンタンク、あるいはその亜種だと思っていたのか、面食らった様子で慌てて射撃を行う。しかし余りの速さ故照準が合わないのか全くあたらない。土煙を上げながら急速に接近してくる。その見かけからは想像も付かない速さであつというまに懷へ入り込まれ……敵MSの右腕から巨大なビームが出現した。空洞は大砲ではなく、でたらめと言える程に巨大なビーム発振器だったのだ。

「ちくしょう！当たれ！当たれよ！！」

パイロットの願いも虚しく、ザクの腹を一瞬にして真っ二つに切り裂く。上半身と下半身でザクが2体出来る。

爆発。

余波から逃げるためかそのまましばらく直進を続けてからブース

ターを消し、慣性でゆるやかなターンを決め残った2機のザクを正面に捕らえるようにこちらを向いた。

「た、隊長。デミアンが……デミアンが！」

「落ち着け。いいか、はつきりいつて今の戦力では奴を撃退するのは難しい。かといってあの速さからは逃げられない。我々に出ることは出来るだけ長く奴の足を止めて援軍を待つことだけだ」

「しかしあの速さですよ？どうするんですか」

「1つやってみaitいことがある。お前は後方で待機している」

ツノの付いたザクが無謀にも敵MSへ突進していく。好都合と見たのか、敵MSもブースターを点火させ一気に間合いを詰めようとする。

ザクが銃を捨てた。

そしてすぐさまクラッカー（手榴弾のような物）を前方に投げつける。

空中で破片をまき散らしながら爆発するクラッカー。敵MSは避けることも出来ず直撃した。ビーム発振器も傷付いたのか、巨大なビームサーベルは不安定な形へと歪む。

それでも完全破壊には至らず、そのぶれたビームのまま、回避行動を取ろうとしていたザクへと光の刃が突き刺さる。

しばしの静寂の後、爆発。同時にビームは完全にかき消える。

「隊長！隊長まで……」

カメラから聞こえる絶望的な声。それでも闘志までは失っていないのか、そのまま突っ込んでくるであろう敵MSを予測し、ザクマシガンを構える。

しかし予測は外れた。敵MSは先ほどと同じくブースターを消し、そのままUの字を描いて反転すると再びブースターを点火させ、あつという間に離脱していった。

映像の再生が終わったのか、ここで画面は停止する。

「悪い冗談を見ているようだな」マ・クベが眉をひそめながら言う。

「解析班によれば、巨大ビームサーベル及び巨大ブースターのテストを兼ねた試作機ではないかとの報告です。新型機の線も捨てきれませんが、これだけの装備を簡単に作る事など出来ないと思われるので試作機の線が濃厚ですね」

「流石にあれが量産機とは考えにくいし妥当な所だろう」

ゲテモノを作るのはジオンの専売特許では無いということか、タマネギ状の形をして回転しながら浮遊する移動砲台のことを思い出していた。

「追跡は？」

「あの速度ですから……しかし映像から有効な戦術は既に練られていますので、次があれば返り討ちに出来るでしょう」

「そうだな」向こうも対策はしてくるだろうがな、とは口に出さず頷く。

「分かった。他に報告は？よろしい、では退出したまえ」

ウラガンの背中を見送りながら、失われたザク2機とパイロットの埋め合わせと、これから増えるであろう連邦のMSによるこういった試作機の実戦投入という嫌がらせとその対処法で積まれる書類がまた増えると考え、ウラガンが完全に消えてから盛大な溜め息を付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2410g/>

マ・クベの憂鬱

2010年10月8日15時53分発行